



『週刊東洋経済』2003年7月26日号(東洋経済新報社)

## 心も蝕む SARS の脅威 感染症撲滅には“共同戦線”を

和田純(神田外語大学教授・異文化コミュニケーション研究所所長)

SARS(重症急性呼吸器症候群)にひとまず「終息宣言」が出された。7月4日時点での世界の累積感染者数は八四三九人、死者は八一二人。中国・香港・台湾の三地域で感染者も死者も九割を占め、中国だけで感染者の六割、死者の四割を占める惨事となった。感染者こそ出なかったが、日本への打撃も大きかった。経済的影響の深刻さは想像以上で、リスク管理に新たな課題が残った。

しかし、打撃はそれだけではない。筆者の周辺でも日本人学生が中国留学を躊躇し、中国人留学生が帰国を望まないなど、日中間の「距離」が遠く傾向が出始めている。修学旅行や卒業旅行先から中国を除外することも広がり始めた。夏休みの中国旅行は、学生にあらかじめ届け出させることも始まっている。日本国際交流センターのメルマガ『月刊情報グラスネット』のアンケート調査では、国際交流・協力を携わる団体の七六%が活動に影響を受けたにもかかわらず、八三%の団体は感染地域との関係回復や支援を予定していないという。

SARSへのおびえは、日中の「心の繋がり」をも蝕み始めているのではないか。SARSの沈静化とともにビジネスは急速に復調し始めているようだが、隠蔽した中国に対する日本人の不信感は、じわりと拡大しているように感じる。中国は自らの魅力を掘り崩し、ソフトパワーの大きな部分をSARSとともに失ったということだろう。その失地回復の重荷は想像以上に大きい。今冬にもSARSの再発があれば、市場や生産拠点としての魅力のみならず、文化や社会への関心までもが萎縮し、信頼と協働といった無形資産まで霧散しかねない。

とは言え、感染症の制圧は特定国だけの課題ではない。皮肉にも、SARS拡散はグローバル化の進展を実感させてくれた。今や危険もやすやすと越境する。たとえば、2010年には、世界最大のエイズ(HIV)感染地域はアフリカでなくアジアになるという。その予測感染者数はインドで二五〇〇万人、中国で一〇〇〇万人。日本も先進国で唯一の増加途上国と見込まれている。

かつて地球上で猛威をふるった感染症にハンセン病がある。しかし、罹患率が人口一万人あたり一人以上という未制圧国は、1985年の一二二カ国から02年には六カ国まで減り、05年が完全制圧の目標というところまで来ている。これには薬の開発と国際的な連合が重要な役割を果たした。WHOだけでなく、計二〇〇億円近い資金協力を続けてきた日本財団や、最終的に薬の無償提供に踏み切った製薬会社などの存在が大きい。

グローバルな惨禍をもたらす感染症の予防と撲滅、そして感染者の社会復帰は人類の共通課題である。SARSも「終息」であって、撲滅されたわけではない。「人間の安全保障」の強化にむけて、セクターを越えた協力が求められている。